2006 年 10 月 7 日

平成 18 年度武蔵工業大学市民講座

第 1 回　1-1 講座概観　1-2 農と食の環境学

市民講座開講に先立って武蔵工業大学環境情報学部学部長　増井忠幸氏から環境と情報の面で地域社会と共生を願い毎年このような講座を開催しているとの挨拶があった。

1-1 講座概観では武蔵工業大学環境情報学部教授の岩村和夫氏から今回の講座の趣旨説明があった。今回の講座の名称は「まちを耕す～食と農と都市の環境デザイン～」と題して都市と農地の共生的な補完関係が失われつつあると言う危機感を共有して、その対応策について、社会・経済・文化・科学・美学などの多角的な側面から考える機会を提供する。講座は 2006 年 10 月 7 日から 12 月 9 日まで全８回 16 講義を２部構成とし、第１部では都市と農地に係わる問題、第 2 部では「まちを耕す」国内外の具体的な事例を取り上げる。また、講師が係わった「港北ニュータウン」の都市計画では都市農地を取り込み持続可能な社会構築に配慮したと言う説明があった。

1-2　　農と食の環境学では、高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科教授の高橋正征氏から「地産地消」こそ、理想的な食物循環系であると言うお話をお聴きした。中国の仏教書に「身体と土とは一つで、人間が歩いていける身近なところで得られるものを食べて、飲んで、呼吸して生活するのが良い」すなわち、「身土不二」、また、わが国では「昔から、自分の身の三里四方の内にあるものを食べていれば、その食べ物は害がなく実りとなる」と言われていた。現代的に言えば「地域自給」と言うこととなる。地球環境の破壊はこのような物質循環が農産物生産地（地方）と消費地（都市）への一方通行になっていることに起因する。今日ではこの一方通行が外国から日本と言う流れとなり、大量の廃棄物が国内に堆積することとなって来た。飽食の時代と言われる今日、地産地消の実現は非常に困難となっているが、人間の英知で、この問題を克服しなければ人類の将来はない。